

目次

- (1) 履修や成果物に関する Q&A
- (2) キャップストーンガイドライン
- (3) アクティビティレポート・アウトラインおよびレポートの例

(1) 履修や成果物に関する Q&A

ST を卒業するためには、次の 2 種類の成果物のどちらかを執筆し、「卒業プロジェクト」もしくは「キャップストーン」科目の単位を修得する必要がある。

- 8 セメスターに卒業論文 or アクティビティレポートの卒業成果物を提出する。
これはゼミにおいて、すなわち 7 セメスターに「卒業研究」(2 単位) を経て 8 セメスターに「卒業プロジェクト」(4 単位) で完成するものである。
- 7 セメスター or 8 セメスターに「キャップストーン」(2 単位) で卒業成果物を提出する。
注意：ホームページ上の図解は 7 セメスターの下となっているが、7 セメスターでなく、8 セメスターも履修可能である。

<https://en.apu.ac.jp/academic/st/seminar/>

- ゼミとキャップストーンの成果物とはどのような違いがありますか (下の比較表も参照)
- キャップストーンの成果物は、ゼミで完成する卒業論文或いはアクティビティレポートと同じ、学生個人作成の成果物である。
- 卒業論文或いはアクティビティレポートのテーマは学生個々人が自由に設定する (もしくはゼミ単位で教員の指示に従う) のに対し、キャップストーンで取り扱う「リサーチクエッション (問い)」は予め提示されるいくつかの候補から学生個々人が選ぶことになる。
- 文字数と取得単位の関係で、キャップストーンの成果物は卒論の簡易版であると考えても良い。
- 卒業論文はより学術的であるが、アクティビティレポートはより実践的である。ただし、両者の境界線がはっきりしない場合もあるので、ゼミの教員の指示に従うこと。

- 履修登録はゼミとキャップストーンでどのような違いがありますか

ゼミは事前申請のうえ、大学が履修登録をするが (ゼミを変更しない場合は、同じゼミに自動継続となる)、キャップストーンは 7 セメスター or 8 セメスター時、学生自身で履修登録期間に登録するものである。

- ゼミとキャップストーンの同時履修は可能ですか

両方履修することは可能であるが、卒業成果物作成にかかる時間を考慮し、どちらも単位習得できない可能性を避けるために同時履修は推奨しない。

- 専門演習 (3 回生ゼミ) の単位を落とした場合、7 セメスター時に卒業研究を履修できま

すか

可能。専門演習（3 回生ゼミ）の単位を落とした場合でも、7 セメスター時に卒業研究は自動的に登録されます。

- 7 セメスターは卒業研究を履修しました。8 セメスターでは卒業プロジェクトを履修せず、キャップストーンのみ履修することはできますか

可能。ただし、7 セメスターに卒業研究の単位を修得した学生は、8 セメスター時に卒業プロジェクトが自動登録されるため、履修しない場合自身で登録削除をすること。

卒業論文・活動レポート・キャップストーンの比較表

成果物	卒業論文	アクティビティレポート	キャップストーンレポート
科目名	卒業プロジェクト（4 回生ゼミ）		キャップストーン
問い	先行研究の不整合 (research gaps) に依拠したリサーチ・クエスチョン	現場の実践・課題とそれに結びつく先行研究の整合・不整合に依拠したリサーチ・クエスチョン	指定された課題と限定された先行研究に依拠したリサーチ・クエスチョン
分析	学術的先行研究を用いて、収集したデータの厳密な分析	実践的先行研究と現場の実践・課題の、両側面から分析	限定された先行研究を用いて、簡易的なデータ収集して、課題の分析
解決策	当該研究から得られた新たな学問的知見に依拠した実践的含意	現場の実践・課題と実践的先行研究に依拠した、より適切な解決策	限定された先行研究とデータ収集に依拠した、一定程度有効な解決策
求められる性質	厳密性（信頼性・妥当性）	適切性（研究成果がどれだけ実践の質を改善するのに役立つか）	疑似的ではあるが、論文の書き方を理解
文字数（個人）	日本語 15,000 字、英語 6,500 Words 以上	日本語 15,000 字、英語 6,500 Words 以上	日本語 8,000 字、英語 3,500 words 以上

(2) キャップストーンガイドライン

● 卒業に必要な成果物・履修科目

ST を卒業するためには、次の 2 種類の成果物のどちらかを執筆し、「卒業プロジェクト」もしくは「キャップストーン」科目の単位を修得する必要がある。

- 8 セメスターに卒業論文 or アクティビティレポートの卒業成果物を提出する。
これはゼミにおいて、すなわち 7 セメスターに「卒業研究」（2 単位）を経て 8 セメスターに「卒業プロジェクト」（4 単位）で完成するものである。

- 7 セメスター or 8 セメスターに「キャップストーン」（2 単位）でレポートを提出する。

注意：ホームページ上の図解は 7 セメスターの下となっているが、7 セメスターも 8 セメスターも履修可能である。<https://www.apu.ac.jp/academic/st/seminar/>

● キャップストーンレポートにおける条件

- キャップストーンレポートは、ゼミで完成する卒業論文或いはアクティビティレポートと同様に、学生個人作成の成果物である。また、卒業論文或いはアクティビティレポートのテーマは学生個々人が自由に設定する（もしくはゼミ担当教員の指示に従う）のに対し、キャップストーンで取り扱う「リサーチクエッション（問い）」は教員が決める。
- キャップストーンレポートの文字数は、目安として日本語 8,000 字、英語 3,500 words 以上とする。質が重要であるため、図表のカウント方法や文字数目安を超えていなくても可否は各教員の判断に委ねる。参考までに、卒業論文/アクティビティレポートは日本語 15,000 字、英語 6,500 Words 以上とされている。
- 文字数と取得単位の比較において、キャップストーンの成果物は卒業論文/アクティビティレポートの短いバージョンであると考えても良い。

● 履修登録における注意点

- ゼミは事前申請のうえ、大学が履修登録をするが（3 回生から 4 回生に上がる際にゼミを変更またはキャンセルをしない場合は、3 回生時と同じゼミにて卒業研究に履修が自動継続となる）、キャップストーンは 7 セメスター or 8 セメスター時、学生自身で履修登録期間に登録が必要となる。そのため、ゼミを続けるかキャップストーンを履修するかについて各ゼミの担当教員と事前に相談することが望まれる。

ゼミとキャップストーンを両方履修することは可能であるが、それぞれの卒業成果物作成にかかる時間・労力を考慮し、どちらも単位習得できない可能性を避けるために重複履修は推奨しない。

● 科目概要

キャップストーンでは、教員の指導の下で企業や地方自治体などの組織から与えられた実際の課題や、教員がそれらの組織を考察して設定する課題について調査研究を行い、4 年次までに各学生が蓄積した知識・技法や社会活動経験を活かし、学生自らで解決策を提案するものである。

本科目は、1 年次に「社会調査法入門」、2 年次に「文献講読 I」、「文献講読 II」、3 年次に「専門演習」、4 年次に「卒業研究」、「卒業プロジェクト」/「キャップストーン」と、系統的に開講される演習科目の最終的な科目に位置付けられる。これらの科目を履修することにより、学生は学術的概

念や理論に基づき、自分の設定した研究課題について深く調査、分析を行い、学生自身が自らの見解を口頭及び文章で効果的に表現する能力を身につけることを目的とする。

- **キャップストーンレポートの要素**

- タイトル

例：Instagram による若年層の観光意思決定への影響：X 市の事例

- 問い（タイトルを質問形式に変える）

例：Instagram は、若年層の観光意思決定にどのような影響を与えるのか？

- 問いに含まれる重要な用語の定義

例：観光意思決定についての定説、若者の特徴、Instagram の特徴、X 市の概要

- 先行研究とその不足への批判

少なくとも先行研究 5 本をレビューし、不足を批判する。

論文は J-stage か Web of Science から取得する。

実際に引用した論文は PDF で実物の提出が必要。

その不足と自分の問いとの関係性を示す。

注：ここで、5 本の論文に対するレビューから導いた問いは形式的であるので、その弱さを自覚し、文末の結論部分で記述する。

- データ収集および分析の方法

例：白杵関連の画像投稿（2022～2025 年）を 200 件×複数タグ抽出、若者（APU 学生）にインタビューする。具体的、実施可能な方法であること。

- 分析と考察、結果

収集したデータを分析して、根拠をもって、問いに対して自分の回答を書く。

少なくとも表 1 枚、図 1 枚

例：「Instagram は、若年層の観光意思決定にどのような影響を与えるのか」への答えに根拠となる図表を用いて、自分の答えを書く。

- 分析・答えから導いた提言

- 結論（論文の意義・限界・今後の課題）

- 参考文献

注：上記にはいくつかの要素が省略されている。詳細な書式要件はキャップストーンの授業内で指示する。

- そのほかはシラバスを参照。

次ページ以降

(3) アクティビティレポート・アウトラインおよびレポート例

アクティビティ・レポート・アウトライン

タイトル

第1章(目安:1,000字)

-活動背景

-取り組んできた活動に対する自分の問題意識から、或いは活動の現場で感じた課題などを提示

-課題をめぐる先行研究の整理

-現場の実践・課題と先行研究の整合・不整合を特定

-リサーチ・クエスション

-調査手法

-現場の実践の描写と分析を通して

-レポートの意義の提示

-自分自身の実践への還元

-実践の現場に還元

第2章(目安:2,000字)

-課題をめぐる先行研究の整理

-網羅的に集める必要はなく、少数の、実践的な課題に結び付く資料・先行研究（実務家向けの記事、実践報告、実際的な研究調査、事例報告、既存の制度に関する資料）。

-実践的なジャーナル(e.g., Development in Practice, Practice: Social Work in Action)

第3章(目安:8,000字)

-現場の実践の描写

-現場から、関連する側面を抽出して事例として構築する。

-データ案（下記のすべてを使わなくてもよいが、複数用いることを勧める）

-自分自身の経験をデータ

-「現場」の二次的資料

-一次的資料。グループで入手したデータの共有をしてもよい。

-これまでのプロジェクト立案・実施等の資料を用いる。一部グループ成果物を用いてもよい。

第4章(目安:3,000字)

-現場の実践を先行研究を援用して分析

第5章(目安:1,000字))

-結論

- リサーチ・クエスチョンに即して
- 意義：自らの実践及び現場の実践・課題への還元を重視
- 限界・展望

付録（オプション）

- PPT
- メディアやその他の追加の成果物の作成：動画、Vlog、マニュアル等

注：

-厳密性（信頼性・妥当性）より、適切性（研究成果がどれだけ実践の質を改善するのに役立つか）

-学生個人作成の成果物であり、目安として日本語 15,000 字、英語 6,500 words 以上とする。
質が重要であるため、文字数目安を超えていなくても合否は各教員の判断に委ねる。

（卒論は日本語 15,000 字、英語 6,500 Words 以上；キャップストーンは日本語 8,000 字、英語 3,500 words 以上）

-研究対象となる「現場」の例：フィールドスタディ、専門実習、インターンシップ（e.g., ジャングリア）、ゼミでのプロジェクト（e.g., 難民支援、難民写真展、地方自治体・商工会議所の受託調査・事業）、地域での活動（e.g., フードバンク、外国人にルーツを持つ子供の特別支援学級でのボランティア、地域おこし協力隊インターン）、起業の経験、ソーシャル・イノベーションのある或いは ST のカリキュラムと親和性のあるサークル、部活、その他の活動。

アクティビティ・レポート例 1

活動例：〇〇商店

(フードロスになるような食材を集め、市民に無料配布する学生サークル)

リサーチクエスト例

- 〇〇商店は、フードバンクとして位置づけることが可能か。
- ボランティアな学生組織である〇〇商店は、どのようにして活動の継続性を図っているのか。
- 〇〇商店の活動は別府市における食品ロス削減と地域福祉向上にどのような影響を与えているのか。
- 〇〇商店の活動は従来のフードバンクモデルとどのように異なり、新しい地域型フードサポートのあり方を提示していると言えるか。

リサーチクエスト：〇〇商店は、フードバンクとして位置づけることが可能か

タイトル：「学生主体の食品再分配活動はフードバンクといえるのか——〇〇商店の実践分析を通して——」

第1章 序論

研究背景、Research Question、研究目的、研究方法、本レポートの構成

第2章 理論的背景と先行研究

フードバンクの定義、関連概念、日本や世界の現状、分類

判定基準の整理（「フードバンクといえる条件」抽出）

第3章 対象組織「〇〇商店」の概要

第4章 活動の詳細と運営プロセス

第5章 分析と考察

「フードバンクの定義」との比較分析

- 判定基準を用いて評価
- 他のフードバンク事例との比較

問いへの答え→ まだフードバンクとは言えず、「フードバンク前段階のフードシェアリング型団体」等の結論を導出

第6章 結論

研究のまとめ、RQ への回答、意義、限界、今後の課題

参考文献

付録

実際の回収データ

配布量推移グラフ

協力団体一覧

アクティビティ・レポート例2

活動例：東峰村の小中一貫校での長期インターン

リサーチクエスション

- 英語教育・異文化理解・郷土理解・キャリア教育を含んだ東峰学園での各活動（APU 訪問、国際交流デー、子ども英語ガイド、APU フィールドスタディー）は、どのように相互に関連し合い、子どもの態度形成に貢献したか
- 上記の活動に対する、学校組織が抱える構造的・人的リソースの課題は何か。

タイトル：「地域と世界をつなぐ教育—APU との連携による実践を通じた福岡県東峰村における教育改革の可能性—」

第1章 序論

-活動背景

-取り組んできた東峰村の小中一貫校での長期インターン活動現場で感じた課題

-課題をめぐる先行研究の整理

-現場の実践・課題と先行研究の整合・不整合を特定

-リサーチクエスション

-調査手法

-アクションリサーチ、混合調査法

-レポートの意義

-自分自身の実践への還元

-実践の現場に還元

-本レポートの構成

第2章 課題をめぐる実践的な先行研究

-グローバル人材の定義

-国際理解教育・英語教育における子どもの態度形成

-郷土理解教育・アントレプレナーシップ教育と地域の関わり

-自己決定理論

第3章 東峰村の概要・各活動の概要

第4章 調査方法

-アクションリサーチ、混合研究法

-データ収集手法

-サンプリング

-アンケート（定量的・定性的質問）、観察ノート

-データ分析方法

-コーディング（定性的データ）

-記述統計（定量的データ）

第5章 分析と考察

第6章 結論

リサーチクエスションへの回答、

意義：自らの実践及び現場の実践・課題への還元

限界

展望

参考文献

付録

アンケート

コード表

アクティビティ・レポート例 3

活動例：東峰村役場でのインターンシップ

(APU との包括連携協定に基づくフィールドスタディ等各種事業のコーディネート等)

リサーチ・クエスチョン：

中山間地域における域学連携は、地域住民の行為主体性にどのような影響を与えるのか

タイトル：

「中山間地域における域学連携は、地域住民の行為主体性にどのような影響を与えるのか」
～福岡県東峰村における立命館アジア太平洋大学との協働を事例に～

第一章 はじめに

- 活動背景
 - APU という国際大学をパートナーとして迎えることで、新たな地域活性化を図ろうと始まった東峰村の連携事業であるはずが、村側の行為主体性が十分でないことに違和感を感じ、問題意識をもつようになった。
- 課題をめぐる先行研究の整理
 - 中塚・小田切（2016）の主張
 - ◇ 学生による活動が地域課題の解決や地域の活性化に影響あり。
 - 一方、受け入れ主体に関する研究は十分でない。
 - すなわち、現場の実践と先行研究の間に不整合があり、先行研究においても不足がある。
- リサーチ・クエスチョン
 - 「中山間地域における域学連携は、地域住民の行為主体性にどのような影響を与えるのか」
- 調査手法
 - 事例研究
 - データ・ソース
 - ◇ 自分自身の実践経験
 - ◇ 観察ノート
 - ◇ フィールドスタディ（以下 FS）参加学生へのインタビュー
- レポートの意義
 - APU と東峰村の域学連携の「質」向上
 - 自分自身の今後のキャリアへの還元

第二章 概要説明

- 東峰村について
 - 基本情報
 - 地域資源（小石原焼、竹棚田、特産品等）

- APU との事業詳細
 - 教育分野の活動内容（国際交流デー、子ども英語ガイド）
 - 行政分野の活動内容（FS、地域行事への学生参加）

第三章 文献レビュー

- 地域の当事者意識
- 域学連携に伴う学生と地域社会の相互作用

第四章 事例

- 地域の当事者意識
 - 現状の連携事業の位置付けと筆者の問題意識
 - 今年度の改善策と、その結果顕在化した新たな課題
- 域学連携に伴う学生と地域社会の相互作用
 - FS の観察ノートに基づく筆者の問題意識
 - FS 参加学生へのインタビュー結果

第五章 事例の分析

- 地域の当事者意識
 - 「FS 参加学生が地域振興案を提案するが、実施しない」状況を生む要因の分析
- 域学連携に伴う学生と地域社会の相互作用
 - 「協力」ではなく「受身的」な村側の姿勢の要因分析
 - FS 参加学生と村側の相互作用を通しての意識変容の分析

第六章 結論

- リサーチ・クエスチョンに対する回答
- 意義：自らの実践及び現場の実践・課題への還元としての意義
- 限界
- 展望

参考文献

付録

インタビュー質問

コード表

学籍番号
氏名

APU 学生団体 ASKA による SDGs 啓発活動における成果と課題
オンラインイベントおよび大分県中津市山国町フィールドワークを通して

立命館アジア太平洋大学
アジア太平洋学部
観光学専攻
学籍番号: 0000000
氏名 : XXX XXXX

担当教員 : 久保隆行
提出日時 : 2025 年 7 月 14 日

目次

第1章 学生団体 ASKA とは何か.....	5
1 節 学生団体 ASKA の設立の思い.....	5
2 節 2 つの取り組み	6
第2章 SDGs を自分ごと化するためのオンラインイベント	7
1 節 オンラインイベントを開催する背景.....	7
(1) オンラインイベントの進め方.....	7
2 節 プロジェクト内容.....	8
(1) YAP 参加中に開催した 5 つのイベント	8
(2) UN75 周年記念イベント	19
3 節 成果と課題	23
(1) YAP 参加中に開催した 5 つのイベント	23
(2) UN75 周年記念イベント	35
(3) オンラインイベントの課題.....	37
第3章 大分県中津市山国町でのフィールドワーク	38
1 節 プロジェクトが生まれた背景.....	38
(1) プロジェクトが立ち上げの契機.....	38
(2) 中津市の地理的特徴と社会課題	38
(3) 視察前に抱いた問題意識と視点	39
(4) 2021 年 10 月の現地視察.....	40
(5) プロジェクトの形態.....	44
2 節 各年度プロジェクトの内容.....	46
(1) 2022 年度プロジェクトの内容	46
(2) 2023 年度プロジェクト内容	50
(3) 2024 年度プロジェクト内容	53
(4) 2025 年度プロジェクト内容	56
(5) 2025 年度の店頭販売の状況.....	58
(6) 店頭販売の改善点及び考察.....	59
4 章 総括	60
1 節 学生団体 ASKA ・モリノエビの活動の総括.....	60

2 節 活動の成果と残された課題、将来展望.....	61
(1) 中津市山国町でのフィールドワーク活動の振り返り	61
(2) 将来の展望.....	62